

まさに今、温泉維新だ！



松田 忠徳(まつただただのり、1949年 -)。国際的な温泉学者。
モンゴル国立医科大学伝統医学部教授(温泉医学)、北京徳稲教育機構(DeTao)教授(温泉学)
を兼任する札幌国際大学観光学部教授(温泉学、観光学)であり、数々の温泉関連の本を執筆
する評論家、旅行作家で、モンゴル研究者としてもよく知られる。
北海道虻田郡洞爺湖町洞爺湖温泉出身。東京外国語大学大学院修了。文学博士、医学博士。

入浴したことがある温泉の数は4600湯を超える。1998年1月から1999年9月にかけて、キャンピングカーで移動しながら全国2500湯を制覇している。その間に「列島縦断2500湯」という日本経済新聞の連載も1年半に亘って行なっている。また、2000年から2002年まで「日本百名湯」を、2000年から2004年まで「新・日本百名湯」の連載をそれぞれ日本経済新聞の土曜日版にて行った。

その後、2006年10月7日号から同紙にて「古湯を歩く」シリーズにて、初回の和歌山県湯の峰温泉に始まり、最終回愛媛県道後温泉で閉める全52回の連載を行った。2008年10月4日からは、同じく土曜版で「温泉列島再発見」シリーズを、初回野沢温泉を皮切りに連載開始した。

今は、月に10日は温泉に泊まります。

①温泉に入ること ②和食を中心に食べること ③笑うこと ④ウオーキングをすること。この4つがきちんとできれば病気になるはず。また介護を受けずに済む。

フランスが一ヶ月のバカンスがとれるようになったのは18世紀後半、フランス革命後のことです。日本は徳川家康が征夷大将軍になったのが慶長8年、1603年でしたかね。その翌年に二人の幼い息子を連れて熱海に湯治バカンスに行く。そこから日本のバカンスが始まり、フランスより早い。

江戸時代、箱根に7つの温泉が開いていた。箱根湯元から始まって、一番奥は芦野之湯まで。それを数泊づつ1ヶ月近く巡る。歩くことで健康的になり温泉に入って更に免疫力が高まる。

「去年は草津の湯に行かなかったから、どうも今年は風邪をひきやすい」と。僕が子供のときはそういう言葉があったんですよ。というのは、予防医学の基本は年に2回の湯治。まず冬の湯治。1月末から2月の初めの一番寒い時。それから土用の丑の湯治。お盆の頃が一番暑いとき。それで暑さにも寒さにも負けない免疫力を持つ心身を作っていた。これが「湯治=予防医学」の本質だと。

イタリア、フランス、ドイツ、ロシア・・・ヨーロッパの先進国は制度や条件の違いはあれ、温泉治療に保険がききます。おまけに交通費までで。ちゃんと科学的根拠を研究したからやれるんです。

温泉には科学的に人間を「還元する力」がある。そうです、抗酸化力です。女性の肌がすべすべになるのは当然のことで、それは大げさに言えば、錆付いた皮膚細胞が、還元力の強い温泉に入ると錆が取れた状態になるからです。だから温泉にとって一番の敵は、空気にふれること、酸素にね。茶色くなった湯の花ってあるでしょう？これは本来、地下では無色透明なんです。含有成分が酸化されるといふ化学変化が起きたからなんです。湯の花は温泉の死骸です。

全国の有料温泉は大体25000軒です。そのうち多くて3割が源泉かけ流し。私の経験上ね、錆をけしてしまえる温泉は源泉かけ流しの中でもごく一部です。酸化還元電位がマイナス100mv以下。正確にはPHとの関係もありますが、それは日本でも1%くらいしかない。

山口県長門市に俵山温泉という湯治場がある。湯治場番付では西の横綱。日本で最も科学的、医学的検証がされた単純温泉なんです。

日本はほとんどの温泉が循環で塩素殺菌されている。これは衝撃だったと思うんですね。温泉を生業としているから、現在は医学的に耐えられる温泉がなくなってしまうことに本当に危機感を抱いているんです。

温泉がいまだにあるということは、その価値があるからなんです。だから、地方ほどね、本物の温泉を提供しないと生き残っていけない。だって、東京23区は日本で一番、温泉密度が高いんですから。